

# 『覚一本平家物語』の語句と物語叙述

——「いくさ」「合戦」「戦ひ」——

## 城 阪 早 紀

はじめに

一一八三年、平家軍と義仲軍は水嶋・室山で戦いを交えた。『覚一本平家物語』<sup>①</sup>（以下「覚一本」）の巻八「水嶋合戦」「室山」によれば、平家軍は、義仲方の大將軍である矢田判官代義清（水嶋）と十郎藏人家（室山）をやぶつて大勝し、「会稽の恥」を雪めとう。

これらの戦いは、次に引用するように、「いくさ」「合戦」「戦ひ」のいずれとも称される。この違いは、何によるのだろうか。

引用の際には、番号とともに、地の文は〔地〕、会話文は〔会〕、文書は〔文〕の記号をそえ、会話文の語者は（ ）内に記す。

1 〔地〕平家は室山・水嶋二ヶ度のいくさに勝てこそ、弥勢はつきにけれ。（巻八「室山」151頁5行）

2 〔会〕（直実）「…『室山・水嶋二ヶ度の合戦に高名したり』となふる越中次郎兵衛はないか、上総五郎兵衛、悪七兵衛はないか、能登殿はましまさぬか。…」（巻九「二二之懸」204頁2行）

3 〔会〕（徳子）「我平相国のむすめとして天子の国母となりしかば、一天四海みなたなご、ろのま、なり。…（中略）…かくて室山・水嶋、ところどころのた、かひに勝しかば、人々すこし色なをッて見えさぶらひし程に、…」

（灌頂卷「六道之沙汰」437頁12行）  
前稿<sup>②</sup>では、「木曾最期」の末文にあたる「栗津のいくさ」に関わつて、「いくさ」と「合戦」の差異について述べたが、そこで十分に論じられなかったところもあり、本稿では改めて覚一本の名詞「いくさ」「合戦」「戦ひ」の意味・用法の差異を検討し、覚一本の語句と物語叙述のありようについて考えたい。

## 一、「いくさ」「合戦」「戦ひ」

「合戦」の語については、山本秀人氏<sup>③</sup>に詳しい。「合戦」は、漢書・史記・荀子などにみえる漢語であり、日本において訓読されるときには、「アヒタタカフ」と和訓読みする例（興聖寺藏大唐西域記卷十二平安中期点）と、「カフセンス」と字音読みする例（上杉本史記室町点）との両方があることを示した。そして、承徳三（一〇九九）年書写加点の真福寺本将門記を取り上げて、字音読み「合戦ス」の場合は抽象的・総括的だが、和訓読み「合戦フ」の場合はより具体的・個別的であるとす。

覚一本に「あひたたかふ」の語がないため両語を対照することはできないが、「合戦す」が抽象的・総括的であるという指摘は、覚一本にも通じるものと思われる。

なお「合戦」は、漢籍で「九月壬戌、与三晋惠公夷吾、合三戦於韓地」<sup>④</sup>（史記卷五秦本紀）のように軍兵どうしが戦いを交えることをいい、日本でも「各ノ軍ヲ儲テ可ニ合戦義ニ成ヌ」<sup>⑤</sup>（今昔物語集卷二五・五）のように、軍、つまり軍兵どうしが戦いあうことを意味する。

一方の「いくさ」は、多義語である。既に辞典類で指摘のあることだが、①「習射所」（射を習ふ所）（日本書紀北野本訓卷三〇）

のように、弓を射ることを意味する例と、②「御軍士乎安騰毛比賜」（皇子は軍兵を引きつれなさつて）（万葉集卷二・一九九）のように武人・軍勢を意味する例、やや遅れて③「もろこしのみかどのいくさにまけたまひぬべかりける時」（前田家本宇津保物語「内侍のかみ」）のように軍勢どうしの戦いを意味する例がみえる。

これについて『古語大辞典』の語誌は「①（弓を射ること。弓を射る術）が原義で、これが転じて弓射る人、武人、軍勢の意味になり、さらに転じて合戦の意となった」<sup>⑥</sup>と説明する。また、『日本国語大辞典』や『古語大鑑』、『時代別国語大辞典（室町時代編）』も、「いくさ」の語釈（③に相当）として「合戦」を併記する。こうしたことから、上代では「射術」やそれを行う「兵士」を意味していた「いくさ」が、しだいに「合戦」の意味するところへ接近していったと、ひとまず理解できよう。

さて、動詞「戦ふ」が名詞化した「戦ひ」も多義語である。①「此等養論ヲシケル間ニ、遂ニ戦ニ成ケリ」（今昔物語卷二六・二）のように、個人間の暴力を伴った争いという例と、②「戦勝而無ハ、驕者、良将之行也」（日本書紀北野本訓卷三）のように、軍勢どうしの衝突を指す例とがある。『日本国語大辞典』は、②に相当する語釈に「戦争をすること。いくさ。合戦」と記し、「いくさ」や「合戦」との意味の近似を認める。また、③「猶漢の



会話文の話者の性別について、「合戦」は11例全てが男性である。「いくさ」は49例が男性で6例は女性、「戦ひ」は2例が男性で1例は女性である。和語である「いくさ」と「戦ひ」は女性の話し言葉として使用される。

### 三、軍兵を意味する「いくさ」と「戦ひ」

まずは、軍兵を意味する例から検討する。「いくさ」は20例あり、このうち、4・6のように中国故事で3例、5のように神功皇后の新羅攻めで3例、貞任・宗任討伐で2例みえる。

また「戦ひ」は5例あり、全てが「いくさ」と対で軍兵の強さをいう例である。中国故事で3例（4・6の二重傍線）、神功皇后の新羅攻めで1例（5の二重傍線）、貞任・宗任討伐で1例みえる。

軍兵を意味する「いくさ」や「戦ひ」は、物語時間から隔たった、異国での戦いを描く場面で、使われる傾向がある。

「いくさ」20例と「戦ひ」5例は、全て次の慣用的な言回しの中でみえる。

- ① いくさ（が）強い／弱い（軍兵の強さをいう） 4例  
 4 「地」いにしへ漢王胡国を攻られけるに、…漢王のいくさよはく、胡国のた、かひこはくして、官軍みなうちほろぼさる。

（巻二「蘇武」205頁8行）

- 5 「地」昔神功皇后新羅を攻させ給ひしに、御方のた、かひよはく、異国のいくさこはくして、  
 （巻第七「願書」72頁2行）

- ② いくさ（が）やぶれる（軍兵が敗れる） 7例  
 6 「地」今度は漢の戦こはくして、胡国のいくさ破にけり。  
 （巻二「蘇武」206頁15行）

- 7 「地」いくさやぶれにければ、主上をはじめてまッて、人々みな御船にめして出給ふ…  
 （巻九「落足」226頁12行）

- ③ いくさをしづむ／いくさ（が）しづむ（軍兵を鎮圧する） 2例  
 8 「地」異国のいくさをしづめさせ給ひて後、  
 （巻五「都遷」333頁11行）

- 9 「地」東国北国のいくさいかにもしづまらず。

- ④ わがいくさ（自らの軍兵） 2例  
 （巻七「主上都落」92頁12行）

- 10 「地」わがいくさの吉例なればとて七手に作る。

- ⑤ いくさの陣（戦場） 5例  
 （巻七「火打合戦」67頁16行）

- 11 「会」（清盛）「さり共いくさの陣ならば、是程浄海は臆せじ物を」  
 （巻三「御産」219頁2行）

- 7 は平家の軍兵が敗れたと取れる一方で、戦いに敗れたと解するこ

ともでき、89も蜂起した軍兵を鎮めるとも、争乱を取めるとも取れる。また10は、義仲軍の戦法とも解釈できる。

#### 四、武力を伴う争いを意味する「いくさ」

続いて、武力を伴う争いを意味する「いくさ」86例について、後述する「合戦」との対比から検討する。

#### 1 文書

「いくさ」は、文書での例はない。

#### 2 会話文

「いくさ」の特徴として、会話文での使用が86例中55例と多いことがあげられる。話者は男性が49例と大半を占めるが、女性の例も6例ある。女性の例は後で述べることとし、先に男性の例を示す。

12 (会) (義経)「…今夜夜討にすすべきか、あすのいくさか」との給へば、  
(卷九「三草合戦」194頁2行)

13 (会) (平家方)「いくさはさだめてあすのいくさでぞあらんずらん。いくさにもねぶたいは大事のことぞ。ようねていくさせよ」  
(卷九「三草合戦」194頁15行)

12は、義経が夜討を仕掛けるか思案する場面である。義経は夜討を

決断するが、平家方は13のように、油断していたために敗れてしまう。「いくさ」はこの例のように、武士が味方どうしで会話する場面や、武士の心内語として使用され、その数は39例にもなる。「いくさ」は戦場で交わされる、武士の日常語といえる。

#### 3 公私

「いくさ」には、「保元のいくさ」のように元号を冠する例はない。

一方で、「いくさ」は私戦である同士軍を指す例がある。

14 (会) (景時)「…御弟九郎大夫判官殿こそ、つゐの御敵とは見えさせ給候へ。そのゆへは、(義経)『…本三位中将殿こなたへたばじと候ば、まいッて給はるべし』とて、すでにいくさいでき候はんとし候しを、…」  
(卷十一「腰越」363頁9行)

14は、梶原景時が頼朝に讒言をする場面である。ここでの「いくさ」は、一谷で生捕った重衡の扱いを不満に思った義経が、範頼と対立しそうになったことをさす。

覚一本に「どしいくさ(同士軍)」は3例あり、いずれも義経と景時が味方どうしで対立することをさす。

#### 4 地名

地名を冠する「いくさ」は、7例ある。

15 (会) (義仲) 「…をみ・あひだのいくさよりはじめて、北国には、…、西国には福隆寺繩手・さ、のせまり、板倉が城を責しかども、いまだ敵にうしろを見せず、…」

(卷八「鼓判官」152頁12行)

16 (会) (義仲) 「今は思ふ事なし。たゞし十郎藏人殿の志保のいくさこそおぼつかなけれ。」 (卷七「倶梨迦羅落」74頁15行)

15は、義仲がこれまでに重ねてきた戦いを回顧する発言である。ここの「いくさ」は、過去の出来事として戦いを客観的にとらえるというよりも、「敵にうしろを見せ」ることのなかった義仲軍の戦いぶりをいうものである。続く16は、倶利伽羅峠で平家軍に勝利した義仲の発言である。ここの「いくさ」も、「おぼつかなけれ」とあるように、十郎藏人行家の戦いぶりをいうものである。

## 5 時間

16の「志保のいくさ」が、過去の出来事ではなく、現在行われている戦いであることも注目される。次の2例も同様に、現在の「いくさ」である。

17 (会) 或は分どりしてかへる物もあり、或はいた手おうて腹かききり、河へ飛入物もあり。橋のうへのいくさ、火いづる程ぞた、かいける。これを見て…(忠清)「あれ御らん候へ。橋のう

へのいくさ手いたう候。…」

(卷四「橋合戦」311頁15行)

18 (会) 院方に候ける近江守仲兼、其勢五十騎ばかりで、法住寺殿の西の門をかためてふせく処に、近江源氏山本冠者義高馳来たり、「いかにをのくは、誰をかばはんとて軍をばし給ふぞ。御幸も行幸も他所へなりぬとこそ承はれ」

(卷八「法住寺合戦」157頁9行)

17は平家の侍大将忠清が、平家方の劣勢を見て取った時の発言である。ここの「いくさ」は、忠清の眼前で行われている戦いであり、腹を切る者や身を投げる者がいたり、具体的である。18も、義高が目撃した、法住寺殿の西門を守る仲兼らの戦いである。

また19 20は、近い将来に自らが行う「いくさ」である。

19 (会) (実盛) 「…実盛今度のいくさに、命いきてふた、びみやこへまいるべしとも覚候はず」と申ければ、

(卷五「富士川」373頁8行)

20 (会) (小宰相) 「…いつよりも心ほそげにうちなげきて、(通盛)『明日のいくさには、一ぢやううたれなんぞとおぼゆるはとよ。我いかにもなりなんのち、人はいかゞし給ふべき…』」などといひしかども、…」 (卷九「小宰相身投」228頁15行)

19で実盛は、戦いを前に討死する覚悟を語り、20で小宰相は、通盛が戦いの前日に死を予感していたことを語る。ここでも「いくさ」

は、個別・具体的である。

## 6 動作主

さて動作主について考えると、16は行家軍の、18は仲兼らの「いくさ」であった。このように「いくさ」は、軍兵の衝突全体の中から、特定の集団や人物の戦闘に焦点を当てる例がある。次に引用するの3例は、一人物に焦点を当てた「いくさ」である。

21〔地〕手塚太郎、郎等がうたる、をみて、弓手にまはりあひ、鎧の草摺ひきあげて二刀さし、よはる処にくんでおつ。斎藤別当心はたけくおもへども、いくさにはしつかれぬ、其上老武者ではあり、手塚が下になりけり。 (巻七「実盛」80頁2行)

22〔会〕(兼平は)ぬのこしたる八すぢの矢を、さしつめ引つめさんくゝにゐる。死生はしらず、やにわにかたき八騎のおとす。其後打物ぬいてあれにはせあひ、これに馳あひ、きつてまはるに、面をあはするものぞなき。…(中略)：今井四郎いくさしけるが、是をき、「いまはたれをかばんとてかいくさをはずべき。…」

(巻九「木曾取期」181頁13行)

23〔会〕河野が身にかへて思ひける郎等を、讃岐七郎をしならべたくしておち、とつておさへて頸をか、んとする処に、河野四郎とつてかへし、郎等がうへなる讃岐七郎が頸かき切て、ふか田へ

なげいれ、大音をあげて、「河野四郎越智通信、生年廿一、かうこそいくさをはずれ。」 (巻九「六ヶ度軍」188頁5行)

21は、実盛が敵一人を討ち取るも、老齢と疲労、刀傷とが重なって、ついに組み伏せられた場面である。ここでの「いくさ」は、実盛がその日に重ねた戦いで、身体感覚を伴うなまましいものである。

22は、兼平が義仲の死を知った場面である。この「いくさ」は、義仲を自害させるたの兼平の奮闘であり、こちらも矢を射たり刀を抜いて戦つたりと具体的である。そして23は、河野通信が主従二騎で敗走する途中、郎党が討たれそうになったのを見て引き返す場面である。ここでの「いくさ」は、郎党を助けるため、命を顧みずに讃岐七郎を討ち取った戦いである。

## 7 女性

話者が女性であっても、「いくさ」が、生き死にをかけた戦いを意味する、なまましい語であることは変わらない。

24〔会〕(維盛北の方)「…いくさといふ時は、たゞいまもやうたれ給らんと心をつくす。…」 (巻十「首渡」240頁2行)

25〔会〕女房達「中納言殿、いくさはいかにやいかに」と口々とひ給へば、… (巻十一「先帝身投」335頁12行)

24は、都にいる維盛の北の方が、斎藤兄弟から消息を聞く場面であ

る。北の方は、維盛が討たれるかもしれないことを、わがこととしてとらえている。25は、壇浦での戦況を知盛に尋ねる、女房たちの発言である。この戦いの行く末は女性たちの運命をも左右するものであり、彼女たちもまた「いくさ」の当事者といえる。

## 8 戦法・戦い方

「いくさ」は、戦闘そのものだけでなく、戦いをどのように進めるかという戦法を意味する例もある。

26〔会〕〔平家方〕「汝等はふるひ者共也。いくさの様をもきてよ」とて、北国へむけられたり。（巻七「篠原合戦」77頁4行）

27〔会〕〔忠清〕「入道殿の御定には、いくさをば忠清にまかせさせ給へと仰候しぞかし。…たゞ富士河をまへにあてて、みかたの御勢をまたせ給ふべうや候らん」（巻五「富士川」371頁6行）

26は、実戦経験の豊富な畠山重能らを、「戦いのやりかたをさしずせよ<sup>⑦</sup>」と派遣する場面である。27は、坂東へ攻めようとする維盛と、味方を持つべきだとする忠清の意見が対立する場面である。忠清が清盛から任された「いくさ」は、26と同様に、軍兵をどのように動かし、いつどこで戦いを交えるかという戦法である。

こうした「いくさの様」は、勝敗に直結する。

28〔会〕〔実盛〕「…いくさはせいにはよらず、はかり事によると

こそ申つたへて候へ。…」（巻五「富士川」373頁7行）

29〔会〕〔義仲〕「…但かけあひのいくさは勢の多少による事也。

大勢かさにかけてはあしかりなん。…：日をまちくらし、平家の大勢をくりからが谷へ追おとさうと思ふなり」

（巻七「願書」68頁8行）

28で実盛が言うように、いくさの勝敗は「はかり事」によって決まる。たとえば、双方の兵力が正面からぶつかる「かけあひのいくさ」(29)では、勢の多い方が有利とされる。そのため義仲は、日暮れを待つて平家軍を谷へと追い込む作戦を取り、勝利を収めた。

## 9 勝ち負け

「いくさ」には、「勝つ／負け」と共起する例が12例ある。

30〔地〕源平両方時つくり、矢合して、互に舟どもおしあはせてせめた、かふ。遠きをば弓でぬ、近きをば、太刀できり、熊手にかけてとるもあり、とらるゝもあり、…：思ひ／＼心々に勝負をす。…（中略）…平家は鞍をき馬を舟のうちにたてられたりければ、舟さしよせ、馬どもひきおろし、うちのり／＼おめいてかければ、源氏の勢、大將軍はうたれぬ、われさきにとぞ落行け。平家は水嶋のいくさに勝てこそ、会稽の恥をば雪めけれ。

（巻八「水嶋合戦」143頁7行）

31 「地」源氏阿波国勝浦について、八嶋のいくさ（くさ）にうちかちぬ。

（卷十一「鷄合壇浦合戦」327頁3行）

30 の「水嶋のいくさ」は、開戦から戦いの様子が詳細に描かれる。

中略部分では、源氏の侍大将が討たれたのを見た大將軍義清が、真つ先に進んで戦うも、船が沈没したことが描かれる。31の「八嶋のいくさ」も、卷十一「勝浦大坂越」で義経が「八嶋の城へよせ給ふ」と攻撃を仕掛けてから、「嗣信最期」「那須与二」「弓流」の四章段にわたって戦いが描かれていた。「いくさ」の勝ち負けは、こうした武士の戦いによって決まる。

戦いの結果を、平家の勝ち（ち）というか、源氏の負け（け）というかは、両軍のどちらに視点を置くかによって異なる。「いくさ」が「勝つ／負け」と共起することは、「いくさ」が客観的に事態をとらえる語というよりも、ある集団に焦点を当てることのある語であることも関わるだろう。

## 10 災 禍

「いくさ」は武士の戦鬪さす語であるが、それは武士以外の人物からすると災禍である。

32 「地」伊豆・駿河の人民・百姓等がいくさにおそれて、或は野にいたり、山にかくれ、或は船にとりのつて海河にうかび、

『覚一本平家物語』の語句と物語叙述

（卷五「富士川」373頁12行）

33 「地」治承・養和の飢饉、東国・西国のいくさに、人だねほろ

びうせたりといへども、…。（卷十一「一門大路渡」350頁13行）

32は、「あすは源平富士河にて矢合とさだめたり」と富士川での戦いを目前に控えた場面である。在住の「人民・百姓」らは、「いくさ」に巻き込まれることを「おそれて」、野山や海へと逃れる。33でも、「東国・西国のいくさ」は「治承・養和の飢饉」と併記されており、人命を奪う災禍とされる。

## 五、武力を伴う争いを意味する「合戦」

続いて、武力を伴う争いを意味する「合戦」27例について述べる。

### 1 文書

「合戦」は、牒状や願書といった文書中で4例みえる。

34 「文」（義仲）「…悪逆をしづめんがために義兵を發す処に、忽に三千の衆徒に向て不慮の合戦を致ん事を。」

（卷七「木曾山門牒状」87頁2行）

34は、入京前の義仲が山門に対して送った牒状中の例である。

## 2 会話文

「合戦」は会話文に11例みえる。発話場面を見ると、上位者に進言する時や晴れの場など、公の性格が強い場面に限定される。

35 (会) 熊野別当、鎌倉殿へ飛脚を奉て、(湛増)「当国湯浅の合戦の事、両三月が間に八ヶ度よせて攻戦。…」

(卷十二「六代被斬」415頁5行)

36 (会) (忠綱)「…秩父・足利なかをたがひ、つねは合戦をし候しに、

(卷四「橋合戦」312頁7行)

35は湛増が頼朝に合戦の次第を報告する場面で、上位者に進言する例といえる。また36のように、戦場で大音声をあげて敵味方と呼びかける名のみや詞戦などは、晴の場での発言である。

## 3 公私

37 38のように保元・平治の「合戦」は7例みえ、固有名詞として定着していることが窺える。これらは物語時間から隔った、歴史上の出来事である。

37 (地) 抑源三位入道と申は、撰津守頼光に五代、三河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子也。保元の合戦の時、御方にて先をかけたたりしかども、させる賞にもあづからず。(卷四「鶴」324頁2行)

38 (会) (慶秀)「…是は一とせ平治の合戦の時、故左馬頭義朝が

手に候ひて、六条河原で打死仕候し相模国住人、山内須藤刑部丞俊通が子で候。…」(卷四「大衆揃」308頁3行)

また、「合戦」に私戦をさす例がないことから、公の性格が強い傾向にあるといえる。

## 4 地名

地名を冠する「合戦」は、「室山・水嶋二ヶ度の合戦」(2)が1例、「湯浅の合戦」(35)が1例、「石橋山の合戦」が2例ある。

39 (地) 此院宣をば錦の袋にいれて、石橋山の合戦の時も、兵衛佐殿頭にかけられたりけるとかや。(卷五「福原院宣」366頁8行)

39の「石橋山の合戦」は、流人であった頼朝がはじめて拳兵した戦いである。この時頼朝の首には、勅勘を許し平家を討伐することを命じる院宣がかけられていたという。ここでの合戦は、歴史を叙述する上で重要な戦いといえる。

## 5 時間

「合戦」は、保元・平治の「合戦」がそうであるように、過去の出来事をさす例が中心だが、その日に起きた戦いをさす例もある。

40は、義経が後白河法皇に河原合戦の次第を報告する例である。ここで「合戦」とあるのは、上位者に進言するという場面性の問題も

あるが、その報告がどのようになされているのかを確認したい。

40〔地〕：九郎義経を大床のきはへめして、合戦の次第をくはしく御尋あれば、義経かしこまッて申けるは、「義仲が謀叛の事、頼朝大におどろき、範頼・義経をはじめとして、むねとの兵物卅余人、其勢六万余騎をまいらせ候。範頼は勢田よりまはり候が、いまだまいり候はず。義経は宇治の手をせめおといて、まづ此御所守護のためにはせ参じて候。義仲は河原をのほりにおち候つるを、兵物共におはせ候つれば、今は定てうッとり候ぬらん」と、

（卷九「河原合戦」174頁14行）

合戦の次第を尋ねられた義経は、頼朝が範頼・義経を派遣した経緯と両軍の動向、義経軍が宇治川で義仲軍を破ったこと、義仲の敗走経路などを、時系列に沿って述べている。直前まで自分たちが行っていた具体的な戦闘には触れず、大局的、客観的な報告である。

## 6 動作主

「いくさ」は特定の集団や人物の戦いを焦点化することがあったが、「合戦」にはそうした例はない。

41〔地〕同十八日、肥後守貞能が伯父、平太入道定次を大将として、伊賀・伊勢両国の住人等、近江国へうち出たりければ、源氏の末葉等発向して合戦をいたす。（卷十「三日平氏」289頁13行）

ここでの「合戦」の動作主は「源氏の末葉」だが、具体的な戦闘の様子は記されない。ここでも、源氏の末葉と平太入道定次との間に戦いが起こるまでの経緯を、日時添えて客観的に述べている。

## 7 女性

「合戦」は、女性の話し言葉として使用されない。

## 8 寺社勢力

戦いを歴史的な出来事としてとらえる「合戦」は、武士どうしだけでなく、寺社勢力による戦いをも指す。34で引用した義仲と山門との対立も、これに含まれる。

42〔地〕：山上には、堂衆学生不快の事いできて、かつせん度々に及。毎度に学侶うちおとされて、山門の滅亡、朝家の御大事とぞ見えし。（卷二「山門滅亡堂衆合戦」194頁12行）

43〔文〕（三井寺）「昔唐の会昌天子、軍兵をもッて佛法をほろぼさしめし時、清凉山の衆、合戦をいたしてこれをふせく。…」（卷四「南都牒状」299頁16行）

44〔地〕治承の合戦の時、こ、にうッたッて伽藍をほろぼし給へるゆへなり。（卷十一「重衡被斬」377頁15行）

42は比叡山の堂衆と大衆との「合戦」であり、両者が武力衝突する

ことは「山門の滅亡、朝家の御大事」である。43は会昌天子が「仏法」を滅ぼそうとした例、44は重衡が南都を全焼させた事件を「合戦」といつている。これらは、仏教史上の重大事件である。

一方の「いくさ」は、全てが武士による戦いであった。

## 9 勝ち負け

「合戦」は「勝つ／負け」と共起する例はない。

以上述べてきたことについて、要点をまとめると次のようになる。

「いくさ」は、会話文での例が86例中55例と大半を占め、武士の日常語であることが指摘できる。また「いくさ」は、武士による個別・具体的な戦闘を意味する語であり、人の生き死にがかかった、なまなましさを伴うものである。それは武士以外の人物からすると、人命を奪うおそれのある災禍であった。特定の集団や個人に焦点をあてる例があることから、主観性の強い傾向にあるといえる。

一方の「合戦」は、願書や牒状といった文書中で使用され、会話文中の例も、正式・公的な場面に限定される。両軍の衝突を俯瞰的にとらえる語であり、客観的な傾向が強い。具体的には、保元・平治の合戦や、石橋山の合戦、仏法の滅亡をもたらず社勢力の関わる戦いなど、歴史上の出来事をさす語である。

## 六、武力を伴う争いを意味する「戦ひ」

最後に「戦ひ」について考えたい。ただし「武力を伴う争い」を意味する「戦ひ」は、9例と少ない。その理由は、「戦ひ」の使用が次の場面に限られるためと考えられる。

①文脈上「いくさ」の語がふさわしいが、武士による戦闘が行われていないために、「いくさ」ではなく「戦ひ」を使う。

②文脈上「合戦」の語がふさわしいが、勝敗をいう場面では、「合戦」ではなく「戦ひ」を使う。

① 「いくさ」を「戦ひ」に言い換える

45 (地) 平家の侍備中国の住人妹尾太郎兼康は、北国の戦ひに、加賀国住人倉光の次郎成澄が手にかゝつて、いけどりにせられたりしを、成澄が舍弟倉光の三郎成氏にあづけられたり。

(卷八「妹尾最期」143頁10行)

46 (公) (文覚) (頼朝) 『此若公の父三位中将殿は、初度の戦の大將也。誰申共叶まじ』と…… (卷十二「泊瀬六代」406頁2行)

45は、生捕りになった兼康の動向を説明する一文である。「北国の戦ひ」は俱利伽羅峠の戦いを指すが、ここでの勝負は戦闘によってではなく、義仲の策にはまった平家軍が俱利伽羅峠に落ちること

ついていた。また46は六代の助命を請う文覚に対し、六代が維盛の子であることを理由に断る頼朝の発話である。「初度の戦」とは、富士川の戦いを指し、ここでの勝敗も、戦闘ではなく、水鳥の羽音に驚いた平家軍が敵前逃亡したことで決着する。

45 46は、兼康が戦場で生捕りになったことや、維盛が戦地に赴いたことを具体的に述べており、文脈上は「いくさ」というのがふさわしいように思われる。しかし、俱利伽羅峠でも富士川でも、武士による戦闘は行われていない。そのために、「いくさ」ではなく「戦ひ」の語が選択されたのではないだろうか。

「いくさ」と「戦ひ」を、武士による戦闘の有無によつて使い分ける例として、次のようなものがある。

47 「地」近年行人とて、大衆をも事共せざりしが、かく度々の戦にうちかちぬ。  
(巻第二「山門滅亡堂衆合戦」195頁2行)

48 「地」(堂衆らが)城の内より石弓はづしかけたりければ、大衆官軍かずをついてうたれにけり。堂衆に語らふ悪党と云は、諸国の窃盗・強盗・山賊・海賊等也。欲心熾盛にして、死生不知の奴原なれば、我一人と思きつてた、かふ程に、今度も又学生いくさにまけにけり。  
(巻二「山門滅亡堂衆合戦」195頁14行)

47は堂衆(行人)が大衆に勝利したことを記す一文である。武士が参戦していないこの場面では、「戦ひ」とある。48も堂衆と大衆の

対立だが、ここでは堂衆に悪党が、大衆に武士である官軍が与している。引用部では、攻め寄せる大衆と官軍に対し、城に籠もる悪党らが、石弓を使うなど「我一人と思きつて」、応戦する様が描かれている。こうした場面では、「いくさ」とある。

② 「合戦」を「戦ひ」に言い換える

49 「地」：昔もろこしに、漢高祖と楚項羽と位をあらそひて、合戦する事七十二度、た、かいごとに項羽かちにけり。  
(巻十「千手前」265頁7行)

49の二重傍線部では高祖と項羽が「合戦する」といい、後続の句では、それを「戦ひ」と言い換える。物語時間から遠く隔たった高祖と項羽との戦いには、「合戦」の語がふさわしいと思われる。しかし覚一本は、前述のように合戦の勝ち負けをいうことを避ける傾向にあるために、「戦ひ」が選ばれたのではないだろうか。

次の例も、同じ理由から「戦ひ」とあるように思われる。

50 「地」御方た、かひかちぬと聞えしかば、蘇武は曠野のなかよりはい出て、「是こそいにしへの蘇武よ」とぞなのる。

51 「地」されどもつるには項羽た、かひまけてほろびける時、  
(巻二「蘇武」206頁15行)

(巻十「千手前」265頁8行)

おわりに

以上述べてきたように、「いくさ」「合戦」「戦ひ」は、いずれも武力を伴う争いを意味する語であるが、覚一本においては、意味・用法の差異が認められた。すなわち、「合戦」が歴史的な出来事という客観性の強い語であるのに対し、「いくさ」は集団や人物に焦点を当てた個別・具体的な武士の戦いを意味する語であった。

「いくさ」が武士の戦闘を意味するのは、「いくさ」が軍兵を意味する語でもあることが関わっている。また「戦ひ」が、「いくさ」と「合戦」の両語を言い換えるかたちで使われていたのは、「戦ひ」が軍勢を伴わない二者間の争いを意味するなど、語義が広いことによるものと思われる。

本稿の検討を踏まえて、室山・水嶋での戦いを「いくさ」「合戦」「戦ひ」と呼び分けることを考えると、次のようになろう。

1で「いくさ」とあるのは、平家軍と義仲軍が水嶋・室山で繰り広げた戦闘について、平家の側から勝敗をいうためと考えられる。  
2で「合戦」とあるのは場面性によるもので、名のりという晴の場での発言のためと考えられる。

3は、大原を訪れた後白河法皇に対する徳子の発話である。女性の発言として「合戦」は適切ではなく、また「いくさ」の語も、生

き死にかかった戦闘を意味する、なまなましい語であるため、法皇に向けた発言として不適切であるために、「戦ひ」が選ばれたと考えられる<sup>⑨</sup>。

そして「いくさ」と「合戦」との関係は、次の例に明らかである。  
52 [地]：美濃源氏佐渡衛門尉重貞といふ者あり、一とせ保元の合戦の時、鎮西の八郎為朝がかたのいくさにまけて、おちうとになつたりしをからめていだしたりし勳賞に、もとは兵衛尉たりしが右衛門尉になりぬ。  
(巻七「主上都落」93頁4行)

この一文は、保元の合戦で為朝を捕縛した重貞について述べたものである。ここでも「合戦」は、歴史上の出来事を客観的にいい、「いくさ」は、ここで行われた武士による戦いをさしている。

覚一本が「いくさ」と「合戦」とを使い分けることは、戦いの中のむ武士に寄りそい、戦場での高揚感や死の覚悟、不安といった心情をも描くいくさと、戦いが起きた経緯と結果を客観的にとらえる合戦という、二つの視座を持ち合せていたことを示唆する。

こうした二つの視座を持つことによって覚一本は、武士のいくさによって合戦を描き、合戦によって物語を進展させるといって、有機的な叙述を可能にしたといえよう。

注

① 『覚一本平家物語』の引用は、以下による。「影印」『平家物語』（龍谷大学善本叢書）思文閣出版、一九九三年。「翻刻」高木市之助ほか校注『平家物語』（日本古典文学大系）岩波書店、一九五九〜六〇年。引用の際には日本古典文学大系の判断を尊重し、促音・撥音を小字で補い、補読箇所も本文と同様に扱った。巻一〜六は上巻、巻七〜一二と灌頂巻は下巻である。

② 城阪早紀『覚一本平家物語』「木曾最期」考——「粟津のいくさ」をめぐって『国語国文』八八・三、二〇一九年三月。

③ 山本秀人氏は、延慶本平家物語に「合戦ス」と「相闘」の両語があることを指摘し、和語「あひたたかふ」は、動作主体が個人、もしくは個人に着目した表現であると述べる。山本秀人「真福寺本将門記における「合戦（カフセン）ス」と「合戦（アヒタタカ）フ」」『筑紫語学論叢2 日本語史と方言』風間書房、二〇〇六年。

④ 山本氏は、和語「あひたたかふ」の語が、竹取物語に2例みえることを指摘し、「あひたたかふ」が本来の、もしくは平常の日本語表現として用いられていた可能性を指摘する。ただし、「合戦」を和製漢語とする特段の根拠が見出し難いことから、「合戦」は本来の漢語とみるのが自然とする。

⑤ 『古語大辞典』「いくさ」項は、原田芳起氏による。

⑥ 章段名としては、「合戦」は11例、「いくさ」は2例ある。巻二「山門滅亡堂衆合戦」・巻四「橋合戦」・巻六「横田河原合戦」・巻七「火打合戦」・巻七「篠原合戦」・巻八「水嶋合戦」・巻八「法住寺合戦」・巻九「河原合戦」・巻九「三草合戦」・巻十一「志度合戦」・巻十一「鶏合壇浦合戦」。巻一「俊寛沙汰・鵜川軍」・巻九「六ヶ度軍」。

⑦ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（新古典文学大系）、岩波書店、

『覚一本平家物語』の語句と物語叙述

一九九一〜三年。

⑧ この傾向は、覚一本独自のものと思われる。たとえば、『延慶本平家物語』には、「合戦」の勝ち負けをいう例もみえる。

⑨ 徳子が、法皇に対して「いくさ」という例は1例あるが、これは知盛の発言を引用したものである。

（徳子）「……さても門司・赤間の関にて、いくさはけふを限と見えしかば、……」（灌頂巻「六道之沙汰」）

（知盛）「いくさはけふぞかぎり、物ども、すこしもしりぞく心あるべからず。」（巻第十一「鶏合壇浦合戦」）

参考文献

- ・ 諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店、一九五五〜六〇年。
- ・ 中村幸彦編『角川古語大辞典』角川書店、一九八二年。
- ・ 中田祝夫・和田利政・北原保雄『古語大辞典』小学館、一九八三年。
- ・ 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版』小学館、二〇〇〇〜二年。
- ・ 築島裕編『古語大鑑』東京大学出版会、二〇一一年〜現在刊行中。
- ・ 上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典（上代編）』三省堂、一九六七年。
- ・ 室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典（室町時代編）』三省堂、一九八五〜二〇〇一年。
- ・ 瀧川亀太郎『史記会注考証』東方文化学院東京研究所、一九三二〜四年。
- ・ 吉田賢抗『史記』（新釈漢文大系）明治書院、一九七三年。
- ・ 前田育徳会尊経閣文庫編『日本書紀』（尊経閣善本影印集成）八木書店、二〇〇二年。
- ・ 佐佐木信綱ほか編『校本萬葉集』岩波書店、一九七九〜八二年。

『覚一本平家物語』の語句と物語叙述

- 小島憲之・木下正俊・東野治之校注『萬葉集』（新編日本古典文学全集）小学館、一九九四～六年。
- 宇津保物語研究会校『宇津保物語 前田家本』古典文庫、一九五七～九年。
- 山田孝雄ほか校注『今昔物語集』（日本古典文学大系）岩波書店、一九五九～六三年。